

鉢かづき姫物語

～「寝屋川便り」35.36号より～

「鉢かづき姫物語」は御伽草子(オトギノソウシ)の中に収められてあり、全国的に読まれているお話です。

桃太郎や、カチカチ山、浦島太郎、一寸法師、花咲じいさん等、23編が収められています。私たちの寝屋川市に古くから伝わる民話のおとぎ話です。

弘安2年(1279)の頃、河内の国寝屋と言う所に藤原実高と言うたいへん裕福な「寝屋の長者」と呼ばれている人が住んでいました。(田畑1200余町、山林数不明、山林奉行2人、台所奉行2人、田畑奉行2人、台所奉行5人等々…)奥方は摂津の国鳴海の里の芦屋長大夫(オサダイウ)の娘で照見と呼ばれ、16才で長者の所へ嫁いできました。諸芸に優れた美女で2人の夫婦仲も良く幸せな毎日を送っていましたが、子供が生まれれないのが唯一の悩みでした。大和の国初瀬寺(現・長谷寺)の観音様へ18日に月参りを続けて子供を授かるようお願いをしていたある夜、「一女を授けるが、14才になればこの鉄鉢をその娘の頭にかぶせよ!」という夢のお告げがあり、目を覚ますと目の前に鉢がありました。それからしばらくしてお告げ通り娘を授かり名前を「初瀬」と名付けて大切に育てました。里では、美人のうわさも高く作法や躰の行き届いた賢女に成長しました。



[市の木は桜、花はバラ]



[授かった「初瀬」]



[鉄鉢を被る初瀬姫]

13才になった初瀬姫は里でも美人の噂も高く、作法や躰の行き届いた姫でしたが、母の照見は、「観音様のお告げ」を忘れずに気にしていました。初瀬姫が14才になった頃から照見は病の床に伏せがちになりました。子を授けて下さった観音様のお告げを強く信じ娘の行く末を安じ、この娘の為にと2月17日、観音様から頂いた鉄鉢を初瀬姫の頭にかぶせ「恥を忍んで耐えて行くように」と教えました。観音様のお告げとはいえ母親は姫を抱きし

めて「あなたがこれから行く久しく幸せになる為には辛抱することです」と悲しみに耐えながら初瀬姫を諭しました。母の照見は翌日2月18日病に屈し天に昇って行きました。悲しいお葬式が終わった後、父の藤原実高は、姫の頭に被った鉄鉢を外そうとしましたが、どうしても外れません。

「何ということだ、姫は人の前に出せない姿になってしまった。」と嘆きました。姫も悲しく、毎日母のお墓に行っ



[母の墓参り]

て手を合わせていました。この頃から「鉢かぶり姫」と呼ばれるようになりました。父の備中守実高も初瀬姫も悲しい日々を過ごしていました。3回忌の法要を終え、父実高は後妻を迎えることになりました。(続く)

鉢かづき姫物語 2 ～「寝屋川便り」37.38号より～

後妻は「浅路」と言い器量は良いが、性格行状は極めて不良でした。実高との間に娘「お賢」が生まれると次第に初瀬姫をいじめようになり長者屋敷の者も「お化け鉢かぶり」と呼びはじめました。噂は里中に広がりました。毎日笑い者にされる初瀬はやがて独りぼっちになり人目をさけていました。近所の子供も姫をみるといじわるをします。



〔 子供にいじめられる初瀬 〕

「私も早く母の所へ行きたい」と墓前で祈願していましたが、遂に屋敷から追い出されました。初瀬は行く所もなく歩き続けて打上の四つ辻まで来た時、浅路に命じられた弟の作兵衛と手代の権九郎が追ってきて初瀬を殺そうと切りつけました初瀬の首を持った権九郎は淀川へ向って走り重くなった首を放りなげて逃げ帰りました。実は照見・初瀬が信仰していた「地藏様」が身代りになって助けて頂きました。現在「明光寺」に「首なし地藏」として安置されています。初瀬は歩を続けて大きな河の堤にきました。亡き母の所へ行きたいと川に身を投げましたが、なぜか鉢をかぶった首が沈みません。川に流されていると通りがかりの船に助けられましたが、姿を見てびっくりして岸へ放置して行っていました。又歩いていると通りかかった「山陰三位中将」というとのさまのふしぎな姿を見ました。



〔 明光寺の首なし地藏 〕

とのさまは姫のふしぎな姿を見ると「あの娘をよべ」と家来に命じました。姫がそばにくると「お前はなぜそのような姿をしているのか？」とたづねました。姫はこれまでのことをくわしく話しました。とのさまは「それは気の毒な事じゃ、行くあてもなければ私の屋敷で働くが良い」と言われました。屋敷へ連れていかれた初瀬姫は風呂番として働くことになりました。幼い頃から下働きなどしたことはありませんでしたが素直に働きました。ある日、山陰中将の四番目の息子(宰相)から声をかけられました。色々な話をするようになりました。未だ独身の宰相は心優しい人で初瀬とは次第にお互いに心がひかれていきました。やがて二人



〔 とのさまとの出会い 〕



〔 下働きの初瀬姫 〕

は約束をしますが、鉢をかぶった見すばらしい姿にはどうすることも出来ません。宰相は父の山陰中将に申出をしました。父は家族に相談しました。兄弟嫁は大反対でした。どうしても一緒になりたければ「嫁くらべ」のテストをしようと言うことになりました。初瀬は皆に迷惑をかけないようにとの屋敷から出ようと考えました。宰相にお別れの挨拶をし旅の姿をして出かけます。宰相からは「心配しなくて良いからー」と暖かい言葉をかけました。

(続く)

鉢かづき姫物語 3 ～「寝屋川便り」39.40号より～

宰相は泣きながら姫を送って屋敷の外にきました。月の明るい夜でした。宰相と姫は月に向かって手を合わせ、心の中で仏様・観音様にも私達をお守り下さい!とお祈りをしました。二人の気持ちに通じたのでしょうか姫が歩き出そうとした時、姫の頭から鉢がとれました。鉢は紙のように空へ舞い上がっていきました。その鉢の中から澤山の金や着物宝物が山のように出てきました。「まあ!これは亡くなった母(照美の方)の贈り物なのです」と言いました。鉢の取れた姫は、どこに出してもはずかしくない美しい優しさを兼ね備えた顔たちでした。姫は宝物をとのさまにおくりました。早速身支度を整えて「嫁くらべ」の場にのぞみました。その姿を見た者は姫の姿だけでなく琴をひかせても歌を詠んでも文字を書いても誰一人かなう者はいませんでした。とのさまは大へん喜んで宰相と姫に広い



【鉢の中からの宝物】

土地を分け与えました。宰相は家督相続し「北の方」となった初瀬姫と共に竹の御所で幸せな生活を過ごしました。

初瀬姫が生まれて乳母の「おこん」は母親の照見の方と共に作法や躰を行っていたが照見に方が他界し備中守藤原実高から照見の方のお墓がある西蓮寺の近くに家敷を建て与えました。茶の池もあり「おこん堂」と言われていたが初瀬姫のことを常に心配し観音様に祈っていました。ある夜、照見の方の夢で京で幸せに暮していることを知り安堵しやがて88才でこの世をさりました。乳母・おこんの屋敷跡は現在寝屋公園(寝屋新町四)にあります。



【嫁くらべの初瀬姫】



【乳母・おこんの屋敷跡】

したことを後悔し罪の消滅の為に霊社仏閣を拝していると語りました。宰相と姫は「これから京で一緒に暮らしましょう」と言いましたが、父は「まだ修業に行く」と言って別れました。

(本号にて終了)

さて後妻の浅路を中心とした寝屋屋敷は、身内の甥が木津の渡し場で事件を起し騒動となり浅路の奸悪な行いから家運は傾き没落しました。実高は修行者となり旅に出ました。初瀬姫は亡母照見の追善供養をする為に長谷寺(初瀬寺)へお参りました。

「初瀬姫だ、初姫だ」と近くの人々が噂をしています。丁度その時父の実高が来ていました。ここで父子は再会しました。父の実高は姫を家敷から追い出